



火の柱

Friends of Jesus 2022.12 第733号

イエスの友五綱領

- ①イエスにありて敬虔なること
- ②貧しき者の友となりて労働を愛すること
- ③世界平和のため努力すること
- ④純潔なる生活を尊ぶこと
- ⑤社会奉仕を旨とすること

イエスの友会は、上の五綱領を、生き方の基盤としているキリスト者と賛同者の群れです。(結成1921年10月5日)

特集『主の業に励みなさい』1p「歌を忘れたカナリアの如く」鈴木武仁2p「わたしの祖父阿閉政太郎」藤本喜代枝「溢れる恵み」中満恵、3p「津具見学記」及川健治「主の道を歩む」渡辺和郎4p「春期聖修会の案内」「会員情報」高島史弘「会計報告」小野島正彰

唄を忘れたカナリアの如く



イエスの友会会長 鈴木武仁

使徒パウロはコリント

にある教会の信徒たちに復活の希望を語った手紙の中で、勝利を賜る神に感謝しつつ、二つのことを勧めます。一つは、動じない信仰、今一つは、主の業に

勤勉であれということです。その理由として、労苦が決して無駄にはならないことを告げています(コリントの信徒への手紙I 15・58)。

これはどういうことを意味するのでしょうか。まず「動じない信仰」をいかに持つかと言うことです。「唄を忘れた金糸雀(カナリヤ)」と言う歌があります。果たして唄を忘れたカナリヤは捨て去るべきなのかです。「いえいえそれはなりません」と歌詞が続きます。それならば「柳の鞭で打ちましょか」。「いえいえそれはかわいそう」と作詞者の西條八十は記しています。ではその解決策はどうするのか、といえば「唄を忘れたカナリヤ」を象牙の船に銀の櫂(かい)をもつて月夜の海に浮かべれば忘れた唄を思い出さすというのです。そこで思うのは、愛を忘れたクリスチャンはどうしたらよいのかと言うことです。神の愛を忘れた信徒は、信仰が揺らいでくるばかりか、肉の欲で満たされ、人に対して思いやりを欠いた行動に出てしまうものです。表情や言葉遣いや態度においてです。切れ味の悪い発言、白黒をつけることが明確であるのは善いのですが、しばしば自分の価値判断で相手を非難して

しまうことがあります。「こんなことも知らないのか。常識ではないか」と高飛車に出てしまいます。人にはそれぞれ価値判断があり、ある物事を過小評価する人もおりありますし、過大評価する人だっているわけです。動じない信仰を持つのは、確かにみことばをしっかりと握りしめていればいいのですが、その解釈においてそう単純に受け入れられない人もいるというのがクリスチャンの実態です。それゆえにみことばを盾にとつて人を裁いてはならないのです。これは主の業とは真逆となる場合すらあります。動じない信仰は、愛に根差したものであり、相手に対して敬意をもって接しているにかかっていると思えます。価値判断は人によって異なりますが、向き合う相手存在そのものの主張を認める「敬意」、レスペクトなくして対話の始点を持つことすらできなくなり、行き着くところは破壊・分断・争いです。忍耐も愛の一つとして数えています。相手を主の主張を聞くことは大事です。それが愛です。主の業とはこの実践でしょう。イエスの友の五綱領の精神の第一の「神にありて敬虔なること」とはこれを意味するのではないのでしょうか。レスペクトなくして、貧しき者、差別されている者、弱者たちへの共感すら持てるものではありません。また彼らの被害者意識から来る非難がましい主張にすら共感することとはできないのです。これは知識を持ち知ると言う事よりも、相手と同じ地点に立つて考えられるかと言うことです。これにも限界があります。それで人を傷つけるのです。唄を忘れたカナリヤが歌を思い出すには象牙の船、銀の櫂をもつて美しい月夜の海に浮かべるように、「敵へ

の愛」をも忘れた信仰者には主イエスがわたしたちの罪のためにレスペクトをもつて犠牲を払ってくれたことを知らせることなのかもしれません。

つぎに「主の業に常に励むということ」は決して無駄なことではないということ。です。「主の業」とは、神の業のことと同じかもしれません。そのイエスはフィリポに教えたことは、自分がなしている業は、自分の内に住まわれる父がなしているのだ、と告げました。そしてそのイエスを信じる者は「わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる」(ヨハネ14・11、12)と言われたのです。これはパウロの告げた主の業以上の大きな業です。イエスの友、イエスの弟子、否、イエスの兄弟となつて主がなした以上の奇蹟の業すらもなし得る特権があるというのです。天の御国を引き降ろしてそこにある限りない豊かさ恵みをもたらすことの力が与えられていることを感謝し、力ある祈りに励むとき、おのずからリバイバルが起こり、神の国は拡大していくのでしよう。復活の主の命と霊でありご聖霊がわたしたちに臨むならばわたしたちのいまの労苦も無駄にはならないというのです。勤勉に主の業に励むと共に、日々なすべきことを果たすことにおいても着実に勤勉に祈りと創意をもつてあきらめずに果たしていききたいものです。イエスの友会は主と共に歩んだ歴史です。困窮者、過酷な労働環境にある者、社会から排除された人々、被害者であり加害者でもあるこの罪深きわたしたちその者が聖化されていくために御国の中に超越して生活するものになりたいのです。

主にすべてを委ねて目前の課題に果敢に挑んでいく勇気を得たいものです。

わたしの祖父 阿閉政太郎(あとしまさたろう)

藤本喜代枝(金沢市)



阿閉政太郎は1857(安政4)年、松任の酒造を営む家に生まれ

た。1872(明治5)年に県立師範学校に入学し、卒業した翌年、わずか17歳で松任小学校の校長に任命された。驚きである。今で云えば高校2年である。祖父はこれに満足せず、1883(明治16)年に上京して、中村敬宇の私塾に入り、漢学・英学を学び、更に津田仙の学農社に入学し、西洋野菜栽培技術を学ぶ。

中村敬宇は英国に留学した漢学者であり、英学者でもある。彼はカナダ・メソジスト教会宣教師に導かれたクリスチャンであった。後に東京高等師範学校の校長、また東京帝国大学教授、貴族院議員にもなっている。

津田仙は農業学校を設立したクリスチャンで、7歳の娘梅子を女子海外留学させている。梅子は帰国後、津田英学塾を設立した。

祖父、阿閉政太郎は金沢教会で求道し、1888(明治21)年に青木仲英牧師より受洗する。27歳の時であった。祖父には二つのエピソードがある。

(1) 1891(明治24)年1月20日、金沢に大雪あり、積雪の重みに耐えかねて石浦町の金沢教会の最初の会堂が倒壊した。人々は「ヤソがつぶれた、ヤソがつぶれた」と喜んだ。当時の新聞も茶化して「ヤソ教会、つぶれた、アーメンどう、アーメンどう、(アー面倒)」と報道した。それは「酒のむな、煙草吸うな、ヤソ教はメンドウな宗教なるなり」から取られた言葉であった。

会堂再建の議が起きた。祖父は祖母と相談して200円の献金を約束した。当時祖父は金沢女学校の英和小学校校長として月給は8円だったので、これは大きな決断であった。そのため自宅の庭を畑にしてストロベリー(西洋いちご)の苗を植えた。6月、収穫は大豊作で、売り出すと19円40銭が得られた。不足分は宣教師が補って下さったので、約束の200円を果たすことができた。その頃、祖父はストロベリーのみならずブロッコリー、カリフラワ―、トマトも作っていた。私の母が生前よく言っていたことを思い出す。「阿閉の庭に生柿の実が地面になっっている」と。当時の人々にとってトマトは見たことも食べたこともなかったから、無理もないことと思う。

(2) 1893(明治26)年、阿閉一家は市内の日本基督教会殿町教会に転会した。小さな教会を発展させるためであった。ところが1897(明治30)年金沢教会と殿町教会との合併問題が起こった。一つの教会になって

有力な伝道をすべきであるという事であった。殿町教会は総会で大多数の会員がそれを受け入れた。しかし、祖父が大反対だったので殿町教会として拒否することになった。寺院の多い仏教王国におけるキリスト教で伝道戦線を拡大すべきなのに、縮小するとは何事かと、反対したのである。それより前、金沢教会の日匹信亮のぶすけ長老が、ある夜、殿町教会の祈祷会に出席し、祖父と話し合いをした。日匹は金沢にある第九師団の主計局長であった。彼は勲章をつけた軍服姿で居丈高に合併論をしたのである。祖父はこれに屈せず、合併に反対し、宣教態勢を拡大すべきであると強く主張した。結局、日匹が屈服された形で終わり、彼は立ち去っていった。合併は中止された。両教会はその後協力を密にし、宣教に励んだ。このようにして殿町教会は危機一髪のところでの存続が決まったのである。「祖父の強硬なまでの反対がなければ、殿町教会の歴史は終わっていた」と、金沢元町教会報に綴られている。また、金沢元町教会百年史にはこのように述べられている。「この難局にあたって阿閉政太郎はよくぞ冷静に対処し、神の器としての聖責を果たしたと思う」と。また、殿町教会会報「潮音」に「兄弟姉妹に告ぐ」と題して、「わたしの宮に食物のあるように、10分の1全部をわたしの倉にたずさえてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふれる恵みを、あなたがた

に注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は云われる。」(マラキ書3:10)の聖句にもとづき、教会員へのすすめを残している。わたしは祖父母に一度お会いしている。樺太に生まれ、敷香(しすか)に4年生までいたが、祖父母が樺太に一度だけ訪ねて下さったのである。祖父は1940(昭和15)年にその信仰の生涯を全うした。主に感謝!(1891年の雪害後、金沢教会は献堂されたが、その会堂は1955(昭和30)年に若草町に移転、若草教会となった。その会堂は国の登録有形重要文化財となっている。(わたしはまもなく卒寿を迎える。2022年1月30日に記す。)

溢れる恵み

中満 恵(東京都)



いつも主にある温かいお交わりを感謝いたします。毎年「イエスの友聖修会」のご案内をいただくながら、今回も参加できそうにありません。中々思うように主の働き人として集うことができません。皆様とまたお会いできますことを楽しみにしています。

東京に出てきてから、思えば火がついたように夢中で、教会の内外でこ奉仕をさせていただき駆け回ってきま

した。色々な方と出会い、同労してきました。振り返るとその光景は、言い尽くし難い感謝と喜び、懐かしさと少しの痛みがないまぜになり記憶として残っています。

死者の復活はないという教えが入り込んでしまったコリント教会に向けて、パウロが書き送った「主のわざに励みなさい」というみことば。もし「復活」が実際には起こり得ない「夢物語」に過ぎないのだとしたら、私たちの宣教はむなしものとなり、キリスト者ほどこの世で惨めな、愚かな存在はないと言えます。「復活の主と出会った！」と叫び出したくなるような強烈な信仰体験が与えられたからこそ、私たちは霊に燃え、主に仕えていくことができるのだと思います。復活信仰こそが、私たちのご奉仕の源泉です。

勤め先の団体では、宗教活動と政治活動が原則として禁止されています。もちろん「宗教家」や「律法学者」を連想させる「宗教活動」をするつもりは毛頭ありません。そうではなく、社会人として長年築いてきた立場があり、私はそれも大切にしなければならぬと思います。そのためFacebookの投稿内容においても節度ある発言とは何だろうかと考えさせられるこの数年間でした。

2020年米大統領選以前から米国と世界に生じた深刻な分断について、切歯扼腕の思いで傍観を装ってきまし。言いたいこと・表現したいことの

半分もできない自分に長年、もどかしさと苛立ちを覚えていました。でもある時から私はこのように考えるようになったのです。私は、守られてきたのだと、制約される不自由さを嘆いていた私を、主はいつもみことばを持って導いて下さった。それをわからず苦々しい思いに苛まれていた私。どうしようもない中、忍耐を持って主を見上げ待ち望み、日々の生活を歩みながらいつの間にか、少しずつですが私の「内なる人」に変化が起きていました。

気がついたら髪は白いものが目立ち目の霞みをどうすることもできない年齢になっていました。相変わらず家には寝るために帰る多忙な生活。与えられた自身の残りの人生を、感謝しつつ大切にしたいと願う今日この頃です。忙しい中、週に一度、黒豆を入れた玄米を炊き冷凍し、必ず一日に一杯のみそ汁や健康に良い食材を摂ることを心がける。やらなければならぬことのリストの多さに、パニックになりそうな自分を見るのではなく、祈りに向け、共にいて必ず助けてくれる主のわざを、日々、見させていた。私」という自我まる出しの肉の自分がやるのではなく、「主」が先立ちやつて下さいます。何という幸いなことでしょうか。

昔の聖徒たち、先人たちの積み上げてこられた尊き祈りの最後尾に繋がっている「私」であることを思い起こす時、これは最早自分ではない。主のわ

ざに励むとは私にとって、「溢れる恵み」以外の何ものでもないのです。

長谷川保読書会

津具見学記

及川 健治(事務局補佐 浜松市)



長谷川保読書会は、本年、賀川豊彦著「一粒の麦」で読了しました。そこで10月の読書会では「一粒の麦」の主な舞台である愛知県設楽町津具地区(旧津具村)に出掛けました。浜松から5名、豊橋から3名、計8名が津具支所に集合し、地元女性職員のガイドで1時間にわたって見学しました。このガイドは大変わかりやすく、主催者として事前に頭を悩ませていた私は本当に助けられました。

見学前半では、津具の豊かな自然環境で生まれ育ち、その後大きな功績を遺した6名の偉人に関する資料館へ。展示物を見て感じたのは、彼らはいずれも、正義感と情の熱さをあわせ持つ人たちでした。

後半は、上津具で教鞭をとりながら伝道なさった村井與三吉師の名を刻んだ石碑と現存する旧集会所を見、下津具交差点の「細野芳江記念碑」で散会となりました。



このように素晴らしい津具ですが、近年は過疎化



の地に更なる霊的復興が訪れることを祈ります。

主の道を歩む

(三河支部例会での奨励抜粋)

渡辺 和郎(蒲郡市) 何も解らずに、唯夢中で主の呼び声だけを頼りに、25歳の時から、ひたすら、主の呼び声だけをたった一つの目当てにここまで、たどり着きました。



ある朝、婚約中の姉妹がヨナラと去ってゆく夢を見ました。それが夢であつても、主は私の愛を試しておられました。折も折、神学校からは、婚約を解消してから、入学申請をするように、との通知がそのあとで届きました。戦いの前に、主は夢を通して、勝利の祈りをさせて下さいました。主の愛のチャレンジに答えることができました。勿論、婚約解消の選択に、私はOKの返事をしました。才能は勿論、学識も、何よりも、4年間の寮費と学費の補償はありません。男子12名の同期生の中で、自分一人だけが、なんの保証もありませんでした。無謀な選択を強いられました。

出身教会は献身者が多く、総ての献身者のサポートは無理でしたから、止むを得ませんでした。在学中の生活費と授業料は一度も滞ったことはありませんでした。その頃の寮の食事は、すいとうとララ物資の脱脂粉乳のスープでした。お米

中学校は2024年度春に統合廃校になると聞きました。

明治末期から昭和初期にかけて大リバイバルが起こった津具

のご飯は週に一回あるかなし。それと校庭の裏庭で細々と栽培した野菜のごつた煮で凌いでいました。同じ頃、家内は、神戸の神学校入学は許されず、千葉の最貧の聖書学院に入学し、近隣農家の栽培後のくず野菜を拾い集めて、それで飢えをしのぐ3年間の学院生活でした。私の受けた苦難など、とても家内の苦難とは比べようがありませんでした。至て、卒業後の貧しさに耐えるための訓練でした。ハレルヤ！

「渡辺さん、卒業しても、あなたを受け止めて呉れる教会は同盟にはありません。」理事の一言、自分で自分の奉仕先を、開拓しなければなりません。同盟の申し出を断つたため、団体での評価は、それは最低でした。今更どの首を下げて、同盟復帰を申請するか。団体人として、不適切な対応をしたからです。

それで最も困難な「嵐の渦中」にある、荒れた開拓途上の教会を赴任先として紹介されました。並み居る親しい同労者は、「あの教会だけは止めた方がいいよ」と思いやりと忠告を込め反対してくれました。教会とは名ばかりで、4家族が、日々反目し合い、ある時集会で牧師の留守に、掴みかかるほどの言い合いになり、急遽集会所に舞い戻ったことがあり、集会などとても維持できるような雰囲気ではありませんでした。その地で7年間は、筆舌には表現できないほどの貧しさの中を耐え忍びました。育ち盛りの3人の子供達は、文字通り、飲みます食わず。その頃の子供たちの写真を見ると、貧困と飢餓渦中のアフリカ難民の子供達と同じ写真そのまゝ。後で見て、啞然としました。渦中の長女は栄養失調が遠因で右目を失明し、主の哀れみと、起死回生の黙示録のみ言葉「泣くな、ユダの獅子、勝ちを得たれば、開くことを得べし。」担当医が不思議がるほどの急転直下の癒しが行われました。御言葉の啓示による信仰の勝利でした！原因は栄養失調なのですが、そのことを

誰も信じませんでした。「今時、栄養失調などあるか！」と若い同労の牧師は私に喰ってかかりましたよ。殆ど毎日小麦粉の水のりが主食でした。団体は牧師のサイドワークを禁じていました。前回も申し上げたように、お米を貰うお金がありませんで、家内は泣いて、「お米のご飯が食べたい」と泣きつかれました。その午後主は彼女の泣き声を聞かれて、30キロのお米の寄進を或る方から頂いたのです。貧しくなければ、主の栄光を拝する事もなかったでしょう！

乏しさの中を通することは、なんと幸いなことではありませんか。貧しさの故に、生ける主の栄光に預かる事が出来ました。ハレルヤ！

そんな貧しい教会でしたが、主の哀れみと後任牧師の血の滲むような努力の結果、今では60人に近い、3階建ての立派な会堂を持った素敵な教会、また、3人の献身者牧師を輩出した立派な教会にまで成長しました。その献身した兄弟たちは、何れも学生の頃から、渡辺の生活ぶりを見て育った子供達です。本当に主は生きておられます。ハレルヤ！

渡辺はこうして17箇所の引越しを余儀なくされて、今日までやってきました。そのいずれの移動も、自分の決断ではありません。その後、千葉の銚子教会に5年間開拓も含めて、保育園の理事長兼事務員の奉仕をさせて頂いて、沖繩に転任を命じられました。時の名誉理事長の安藤仲市牧師の推薦でした。これとても、力不足の渡辺が何故同盟の働きの重要な拠点としての沖繩に赴任することになったか、それには深い摂理と主の配剤が陰であつたからです！

その教会は、沖繩で、中堅どころの教会でした。三年目の年度末、診断の遅れから、硬膜下血腫を罹患し、後1時間しか命脈が残って、執刀の脳外科医が、昏睡状態の渡辺に執刀し、手術中、30名近い牧師達が大声を集中して、瀕死状態の渡

辺の癒しのために祈ってくれました。本人は知る由もありませんでしたが、危ういところで一命を取り留めました！執刀の医師は術後何度も「貴方の神は生きておられる」と私に打ち明けて下さいました。未だまだやり残した主の働きがあつたのでしよう。ハレルヤ！

春期聖修会開催のお知らせ

昨年からは始まった春期聖修会にぜひ、ご参加ください。

日時…2023年2月20日（月）～21日（火）

場所…湯河原 千代田荘神奈川県足柄下郡湯河原町宮上637

TEL 0465-631-1153

テーマ『貧しき者の友となり労働を愛すること』

聖書…ローマ12章6～10節

2月20日（月）

午後5時 受付開始

5時半～6時 開会礼拝 長谷川勝義さん

6時半～7時 夕食・交流

7時～8時半 講演『キリスト教社会奉仕（仮）』佐々木炎さん

8時半～9時半 中央委員会

2月21日（火）

朝7時～8時 早天祈祷会 大野剛さん

8時～9時 朝食

9時15分～10時半 証・講演を受ける感想など

10時半～11時半 中央委員会2

11時半～12時 閉会礼拝

金子信一さん

12時～ 昼食

13時～ 湯河原駅前路傍伝道

解散

参加費 一万円 一泊三食付
申込み締切 2月14日

申込みは、同封振込用紙の振込を持って行う。

【二〇二二年度会計報告】

《二〇二二年九月以降二〇二三年十一月迄の状況》

◎維持費（二万二千元）二名（寺尾貞亮、長谷川衛）

◎会費（三千円）五名（仲里朝治、長谷川衛、長瀬潔、木下宣世、遠藤高示）

◎感謝献金三名（寺尾貞亮、長谷川衛、杉山準規）

◎イースター献金三名（鈴木武仁）

◎購読料（千五百円）四名（平松英治、長瀬潔、夏目愛子、播本秀史）

◎登録料（五百円）二名（遠藤高史、遠藤恭子）

◆会費納入と献金のお祝い◆

▽たくさんの方から会費や献金をいただきました。感謝します。引き続き、各事業活動の費用のための会費や献金をお願いいたします。（会計担当 小野島正彰）

【会 員 情 報】

◎召天者 宮原亨2022年8月29日召天

◎イエスの友会の会員の山川百合子さん、10月23日、草加市長に当選しました。おめでとございます。

○新規会員 遠藤高示・恭子2022年11月24日入会（推薦 鈴木武仁）

「火の柱」第363号

発行人 鈴木武仁

発行所 イエスの友会本部

発行日 2022年12月20日

本部事務局

441-8016 愛知県豊橋市弥生町西豊和4、7 高島史弘（イエスの友会 事務局長）

メール takashima.m33@japan.email.ne.jp

郵便振込加金名 イエスの友会本部

口座番号 0017074600000

火の柱編集 長谷川勝義

火の柱編集メール先 bwp5y8@j.comnuf.jp

〒440-0026 愛知県豊橋市多米西町2-20、12 電話・FAX 0532-61-4822